社会人リカレントセミナー「ジェンダーと防災：性的多様性と妊産・乳幼児」レポート

11 月 8 日（土）13:00～16:30 に静岡大学静岡キャンパスの地域創造学環棟で開催されたリカレントセミナーに参加した。

本セミナーは静岡大学ジェンダー研究所所長の白井千晶教授がコーディネーターを務め、静岡大学人文社会科学部、静岡県、公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムが主催した。また、対面と zoom によるオンラインを併用して開催された。

今回は本セミナーに参加させていただいた静岡大学学生防災ネットワークの塚本由喜美（静岡大学 3 年）がレポートを担当する。

▲セミナーのチラシ

▲オープニングの様子

1. 「性的多様性（LGBTQ+）と災害」山下梓さん（弘前大学男女共同参画推進室）※オンラインでのご登壇

【LGBTQ＋について】

・ LGBTQ＋の“＋”は LGBTQ に含まれない性のあり方を指し様々な性のあり方を包括するという意味がある。
・ 災害時要配慮者としての認識率「は、社会集団によって異なる。配付資料によると、次の各主体を要配慮者と認識している自治体の割合は、高齢者が 92.7%、障がい者は各障がいで 90%前後、乳幼児と妊産婦がそれぞれ 75%程度であるのに対し、LGBT はわずか 10.3%であった。以上から LGBTQ が要配慮者として見える化されていない現状が分かる。

【LGBTQ＋が災害時に困ったこと（配付資料より一部抜粋）】

〈避難の手前、避難場所で〉

① 避難所への避難をためらった。
理由：スペースが世帯単位で割り当てられていた。同性カップルが受け入れられるか、そもそも「同性パートナー」と言って理解されるか不確か（レズビアン、胆振東部地震）

② 避難場所で、地区の避難者名簿とジェンダー表現が違うことを理由に、安全を保障できないと告げられた（トランス女性）→山下先生によると、このトランス女性は自宅が全壊しており、別の避難場所を探したという。

〈避難所で〉

③ ボランティアの人が、トランスジェンダー避難者を「オカマ」と表現（東日本大震災）

④ トイレの使用を避けるために水分摂取を控えた（トランスジェンダーの人たち、東日本大震災）

〈避難生活の中で〉

⑤ 知的障害のトランス女性を、男性介助者が男性用風呂に入浴介助（トランス女性、熊本地震）

⑥ 地域の公衆浴場が無料開放されたが、身体の状態から利用がためらわれ、3 週間入浴できなかった（トランス女性、熊本地震）

【望まれる支援のあり方（配付資料より一部抜粋）】

〈避難者の受付、避難スペース〉

- 避難者カード：性別欄は自由記述の任意欄、または、選択肢を挙げる場合は「女性、男性、男女以外、答えない」/家族には同性パートナー（子連れの場合もある）も含まれることを想定し、その旨を明記
- 避難所のスペース：「世帯」を再定義しておく/「世帯」以外にも対応→山下先生によると、世帯以外の選択肢を広げることが重要とのこと。/プライバシーを確保

〈男女別の施設、支援〉

- 既存施設に男女用のスペース（トイレ）しかない場合でも、建物内に複数ある場合には一部に「だれでもトイレ」とはり紙をすることで対応可能
  →山下先生によると、男女という区別だけではなく、『オールジェンダー』にも対応する考え方が重要だという。
- 自立式トイレを用意する場合には、男女別のほか、ユニバーサルトイレも準備
- 入浴は個別利用の時間を設ける
- 支援物資は、受け取りに来た人の見た目の性別にとらわれず、受け取りに来た人自身か、その周辺者が必要ととらえて渡す

【質疑応答（一部）】

参加者から複数の質問が寄せられた。以下はその一部である。

Q1. LGTBQ＋の当事者が求めている支援を知りたい。

A1. 「にじいろ防災ガイド」から確認することができる。「にじいろ防災ガイド」は下記の高知ヘルプデスクの web サイトから PDF を無料でダウンロードできる。https://kae764.wixsite.com/help
「にじいろ防災ガイド」とは「災害時であってもだれもが尊厳をもって避難所や仮設住宅で暮らし、元の生活に戻っていくという理想の状態を『にじいろ防災』と名付けて、岩手県内 3 か所と南海トラフ地震への備えを進めている高知で『にじいろ防災』の実現に向けたワークショップを行い」、「ワークショップで出され

た課題や対応策などのアイディアをまとめたもの」（上記サイト引用）である。

【感想】

- 講義を踏まえ、災害時の当事者の安心のために下記が重要だと感じた。
  ① 災害時だけでなく普段から LGBTQ＋への偏見や差別を無くすこと
  ② 一人一人が LGBTQ＋の方々は「見えていないからいない」のではなく「見えていないだけで実際にはいるかもしれない」という考え方に変えること
  ③ 当事者や当事者が求めていることを本セミナーのような講座や「にじいろ防災ガイド」等から知ること
  ④ LGBTQ＋への配慮をガイドラインに盛り込み実践すること
- 実際に災害時に困った事例を知ってはじめて LGBTQ＋の状況を自分事として想像できた。こうした事例を多くの方に知ってもらうための教育機会や「にじいろ防災ガイド」のようなツールは非常に重要だと感じた。
- 講義や「にじいろ防災ガイド」を踏まえ、当事者にとって自認の性に従って生きることは個人のアイデンティティや尊厳を守り、自分らしく生きるために非常に重要なことである。
  災害時でも誰もが自分らしく安心して生活できるよう、社会全体で当事者の声に耳を傾けること、当事者のニーズを知ることやそのための教育機会が必要だと感じた。私自身も当事者が求める支援を今後も勉強したい。
- 名簿の性別記入欄やトイレの男女の区分けにもきめ細やかな配慮が必要だと感じた。
- 当日は乳児連れの参加者もいて、小さなお子さんに対応する場面も見られた。日頃からの乳幼児とその家族に対する寛大な心も、社会全体で子育てを支援することや災害時の乳幼児とその家族の安心につながると感じた。

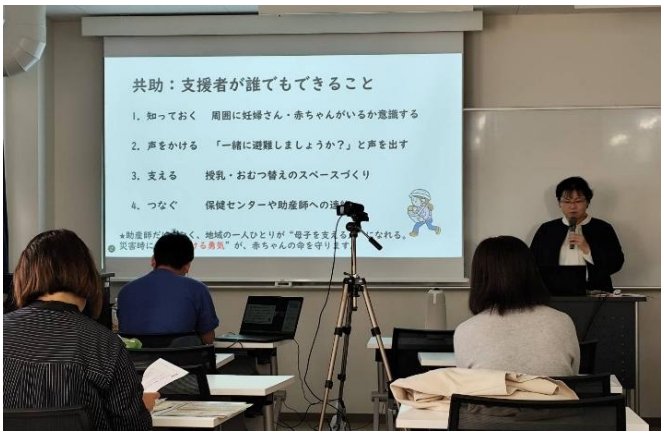
2. 「妊産婦・母子の防災と支援」赤井智子さん（日本赤十字社医療センター）

【内容】

- 妊婦の身体の状態について妊娠初期、妊娠中期、妊娠後期に分けて学び、産婦の身体的な特性を学んだ。赤井先生は「想像するトレーニングとしてこれらの特徴をイメージしながら聞いてください」と話した。
- 妊産婦の身体的特徴を踏まえ、避難行動や避難所における要配慮者としての妊産婦の特徴を学んだ。
- 災害時の調乳手順の例として紙コップと湯冷ましで調乳する手順を学んだ。
- 水がない時の赤ちゃんのスキンケア方法を実際の動画を見ながら学んだ。
- 自助：妊産婦自身が日頃から準備すること（配付資料をもとに要約）
  ① ハザードマップの確認
  ② 避難の準備（安全な避難経路のシミュレーション、母子手帳を避難時に必ず携帯するなど）
  ③ 自宅の安全対策（家の耐震性や自宅の中の安全な場所を把握）

④　在宅避難の準備（子どもの衛生用品の備蓄）

・　共助：支援者が誰でもできること（下の写真も参照）（配布資料より引用）



①　知っておく：周囲に妊婦さん・赤ちゃんがいるか意識する
②　声をかける：「一緒に避難しましょうか？」と声を出す
③　支える：授乳・おむつ替えのスペースづくり
④　つなぐ：保健センターや助産師への連絡
★助産師だけでなく、地域の一人ひとりが“母子を支える人”になれる。
　災害時に“声をかける勇気”が、赤ちゃんの命を守ります。

【感想】
・　妊産婦・母子への配慮を考える際に、妊産婦と乳幼児の特徴を知ること、妊産婦の心身の状況を自分のこととして想像してみることはまず大切だと感じた。
・　妊産婦にとっては、水分、栄養、口腔ケア、トイレの確保、プライバシーを確保できるスペース、精神的なケアが必要である。
・　災害時の調乳･授乳の方法や赤ちゃんのスキンケア方法を学べた。こうした知識を多くの方に知ってほしい。
・　誰でもできる支援（共助）として、勇気をだして声をかけること、自分自身が手助けできなくでも助産師につなぐことなど、できることは多くあると感じた。また、普段からの地域での交流は、妊産婦の存在を把握し災害時に適切な支援に結びつけるために重要で、防災において非常に大切なことだと認識した。

3.　「乳幼児を守る災害対策」原田博子さん（しずおか子育て防災ネットワーク／はままつ子育てネットワークぴっぴ）

【内容】

- 「しずおか子育て防災ネットワーク」は静岡県内の子育て支援団体や支援者が「子育て×防災」を軸につながるネットワークで、災害時に子育て家庭（主に、様々な支援からこぼれやすい乳幼児の世帯）に対して支援活動を行なっている。2025 年 9 月末時点で静岡県内の東部 13 団体・中部 14 団体・西部 12 団体の計 39 団体が所属している。
  能登半島地震・清水区の断水・牧之原市竜巻災害で、物資支援・断水時の洗濯ボランティア・親子の居場所支援や遊び場の提供などを実施している。
- 母子は被災後に姿が見えなくなるが、実際には車中泊をしているケースもある。乳幼児家庭は小さな子どもを連れて行くことによる影響・迷惑から避難所には行きにくい。
- 支援者のネットワークとして、東部・中部・西部の団体が所属する「しずおか子育て防災ネットワーク」が県・市・災害支援団体・県外の子育て関連団体と連携を図っている。
- 連携においては防災・災害分野の団体にとどまらず、様々な分野と連携することが大切である。

【感想】

- 親子の居場所の重要性を改めて認識した。災害時は親も子どもも精神的なストレスや疲弊を感じやすい。そうした際に、子どもの遊び場・親子の居場所は、親子にとっては親同士の交流の場や安心して本音を話せたり支援を受けたりできる場として、支援者にとってはニーズ把握や情報共有により適切な支援につなぐ場としての役割を果たせるからである。
- つながりやネットワークの形成による支え合い体制の重要性を改めて認識した。また、防災は様々な分野（子ども支援・教育・医療・福祉・ペットなど）に関わるため、分野を越え様々な分野の組織と連携することが大切だと感じた。私自身や私の所属する静岡大学学生防災ネットワークでも様々な人・組織とのつながりをさらに作ることにより防災力向上や災害時の迅速な支援につなげたい。

《参加して》

要配慮者の中でも LGBTQ＋・妊産婦と母子・子育て家庭を対象に、それぞれの特徴・災害時の課題・必要とする支援を学ぶことができた。要配慮者に関するこれらの知識や事例を学び自分にできる支援を実践することと、普段からの地域での交流（防災訓練、地域イベント、自治会など）やつながり・ネットワークの形成がいかに重要かを認識した。

今後も要配慮者支援について学び続け、災害時に心身ともに誰もが安心して過ごせるために自分にできること

を平時・災害時において実践したい。

本セミナーの開催にご尽力いただきました皆様、登壇者の皆様、ありがとうございました。